

水と油と血

街外れにある二十四時間営業のファミリールレストラン。深夜ということもあり、客はほとんどいない。窓際のボックス席に信とアメリカが横並びに座っている。そこに近藤が相席を申し出てくる。

ファミリールレストラン（夜）

座席の左奥に背広姿の信、手前に補色で彩られた水玉模様のワンピースを着たアメリカが座っている。テーブルの上にはコーヒーカーップとストローが刺さったグラスが置かれている。信はスマートフォンを弄っている。

アメリカ 「ねえ、さつきから何やってんの？」

信 「何をしてると思う？」

アメリカ 「質問に質問で返さないですよ。どうせ覗きでしょ？」

信 「ご名答。今、僕はスマートフォンを駆使してトイレをリアルタイムで覗いています」

アメリカ 「まあ、凄まじい変態なこと」

信 「毒キノコの妖精みたいなワンピースを着たオカマに言われたくないよ」

アメリカ 「あら、妖精だなんて、あたしに相応しい形容よ。ありがとう」

信 「（スマートフォンを弄りながら）ちよつと黙ってて。今、集中したいんだ」

アメリカ 「あつそ、集中するのは良いけど、

パンツは脱がないでね」

しばしの沈黙。

信 「(溜息をつき) よし、終わった」

アメリカ 「あなた、早いよねえ」

信 「何が？」

アメリカ 「何がじゃないわよ。あなたには

ユーモアの欠片もないのね」

信 「それって生きていくのに必要な
の？」

アメリカ 「残酷で不条理な世の中には必要
不可欠よ」

信 「君はユーモアを持っているの？」

アメリカ 「あたしはユーモアの塊よ」

信 「(アメリカの全身を注意深く見て)

そのようだね。ということとは、
君が持っているなら僕は持たな

くても良いということじゃない
か」

アメリカ 「いったい、どういう理屈でそう
なるわけ？」

グラスを持った作業着姿の近藤がボツ
クス席に近づいてくる。

近藤 「相席しても良いかな？」

アメリカ 「(周りを見渡し怪訝そうな顔を
して) えっ、相席？」

近藤 「(右側の席に腰掛けながら) そ
う、相席。問題ないでしょ？」

アメリカ 「あんた、周りを見回してみなさ
いよ。ほら、空いているでしょ
？」

近藤 「この席が良いんだよね」

アメリカ 「(立ち上がり) じゃあ、あたし

「たちが席を移動するわ」

信 「まあまあまあ、アメリカ、この人と相席しようよ。楽しそうじゃないか。こういうのがユーモアなんだろう？」

アメリカ 「(スマートフォンを指差し)その文明の利器で言葉の意味を調べてみなさい」

アメリカ 「(スマートフォンを指差し)その文明の利器で言葉の意味を調べてみなさい」

アメリカ 「不貞腐れながら再び席に座る。」

近藤 「(にたにたと笑いながら) 君たちはウワサ通りだね」

「僕たちはどんな噂をさしているんですか？」

信 「僕たちはどんな噂をさしているんですか？」

「美しいオカマとピンぼけのオタクでしょ？」

近藤 「まあ、そんなところだね」

アメリカ 「まあ、そんなところだね」

信 「えっ、美しい？ (アメリカを指差し) 毒々しいの間違いでしょ？」

「？」

アメリカ 「(近藤を指差し) あんたは、あたしたちのことを知っているみたいだけど、あたしはあんたを知らないわ。自己紹介ぐらいしなさいよ。それにどうして、この席が良いのかしら」

近藤 「俺は近藤薫。しがない掃除屋だ。君たちに聞きたいことがあるんだ」

信 「お掃除屋さんが僕たちに何を聞きたいんですか？」

アメリカ 「そりゃあ、トイレ掃除のコツに決まっているでしょ」

信 「ああ、なるほどねえ」

近藤 「なぜ君たちは綾川凜にストークングしているんだい？」

アメリカ 「あら、ずいぶんとダイレクトな

アメリカ 「あら、ずいぶんとダイレクトな

物言いね」

信 「僕はこういうの好きだよ」

近 藤 「質問に答えてくれないか」

アメリカ 「それは掃除屋に関係のないことよ」

近 藤 「それがさ、関係大ありなんだよねえ」

信 「ほお、それは面白いですね。ね？ アメリカ、楽しくなってきただろ？」

アメリカ 「どこが面白いのよ。面倒な展開になってきただけじゃない」

近 藤 「君たちは俺の仕事を邪魔している」

アメリカ 「あたしたちが掃除の邪魔をしているってこと？」

近 藤 「そう。だからストーキングを止めてほしい。そうすれば、全て丸く収まる。俺が望んでいる結末と君たちが望んでいる結末は

一緒なんだよ」

信 「あつ、“掃除”って、そういうことなんですね。なるほどねえ」

アメリカ 「ねえ、ちよつと、信だけ納得しないですよ。あたしには、さっぱり理解できないわ。(近藤を指差し) あんた、どういうことなの？ 説明しなさいよ」

近 藤 「俺はどんな依頼も断らない掃除屋だ。俺のことを“ハゲワシ”と呼んでいる奴もいる」

信 「腐肉食のハゲワシか。ぴったりなアダ名ですね」

アメリカ 「ということは、ハゲちゃんは殺しもやっているのね」

近 藤 「ハゲちゃん？」

アメリカ 「ハゲワシって呼ばれているんですよ？ だからハゲちゃん。当然でしょ？」

近 藤 「いやいや、俺は近藤だからコン

「ちゃんで良いだろ？」

アメリカ「嫌よ。あんた、コンちゃんっぽくないから」

信「ハゲちゃんさん」

近藤「ハゲを愛らしさと敬意で飾っちゃダメだよ」

アメリカ「ハゲ」

近藤「もつとダメ。それは言葉で殴っているのと同じだよ。（自分の頭髪を触りながら）それに俺はハゲていない」

アメリカ「そう堅いこと言わず、いずれハゲるんだから良いじゃない」

近藤「わかったよ。もうそれで良い。」

「そんなことより、ストーキングを止めてくれるのか？ 返事によつてはやりたくもない依頼外の仕事が増えることになる」

信「僕たちも掃除されちゃうってことか」

アメリカ「あらあ、怖いわねえ。（微笑みながら信を見る）でもねえ」

信「（微笑み返し）うん、ハゲちゃんさんが綾川凜を掃除しようとする限りストーキングは止められないですね」

近藤「そっか……」

数秒間の沈黙。

近藤「（頭を掻きながら）念のため、君たちと綾川凜の現在に至るまでの関係を確認するよ？」

アメリカ「あたしたちは殺されるんでしょ？ だったら確認なんて不要よ。それとも見逃してくれるわけ？」

近藤「いいや、後できっちり死んでも」

らう。ただ俺は納得しないと動かない性分なんでね」

信 「じゃあ、死ぬ前に大事な確認作業に付き合いますよ」

近 藤 「そうか、助かる。(信を指差し)君と綾川凜は中学校のクラスメイトだった。君は良く言えば人畜無害な生徒で、綾川凜は明朗快活な生徒」

アメリ 「そうね。信は良く言えば人畜無害ね。煙草も吸わないし、お酒も飲まない。それにベジタリアン」

近 藤 「今の俺にとっては酷く有害だがな。そんな平凡な信くんと誰からも好かれる凜ちゃんに神様は残酷な試練を与えた。それも二人同時にね」

アメリ 「神様は勝手よねえ。きつと誰かを不幸にするために誰かを幸福

にしているのよ。まったく何様のつもりよ」

近 藤 「中学二年生の頃、君たちの両親は死んだ。綾川凜の母親が運転する車に轢かれてね」

アメリ 「クラスメイトの親に自分の親が轢き殺されるとか、すごい確率よね」

信 「ときどき神様は意外性を求めるんだよ」

近 藤 「両親が死んだ君たちは親戚をたらい回し、人殺しの娘である綾川凜は事故の影響で一家離散。君たちは散々な人生を送ってきたんだな」

信 「そうですね。否定はしません」

近 藤 「だったら、なぜ綾川凜を守るよなことをするんだ？ 車で事故らせようとブレーキに細工したら、タイヤをパンクさせた上

に十円傷で卑猥な落書きをして警察に通報。家に忍び込んで帰宅直後を襲おうとしたら、爆弾を仕掛けたと警察に通報。他にも色々ある。いったい、どういうつもりなんだ？ 君たちにとって綾川凜は憎むべき存在だろ？ 人生を狂わせた元凶の娘なんだろ？」

信 「僕たちは養子だったんですよ」

近藤 「君たちの戸籍を見たから知ってるよ。物心がつく前に養子縁組されているから、さほど重要な事ではない。血縁の問題は一时的に親子関係の障害になるかもしれないけどね。生みの親でなかったにしろ、普通は殺されたら恨むもんだろ？」

アメリカ 「まともな養子とまともな里親だったらね」

信 「まともじゃない里親の理想からズレてしまった子供はどうなると思います？」

近藤 「はて、どうなるんだ？」

アメリカ 「赤の他人になるのよ。あたしたちが望んでいなくてもね」

近藤 「(にやけながら) 君たちと両親は元から他人だろ」

アメリカ 「あんたさ、あたしたちは死亡確定の状況で無意味な確認に付き合っただけで、あたしたちから皮肉は止めてよね」

近藤 「そうだな。すまない」

信 「両親は僕たちに無関心でした。下手くそながらも頑張っただけで似顔絵を描こうが、運動会のパン食競走で奇跡が起きて一位を取ろうがね」

近藤 「ネグレクトされていたのか？」

アメリカ 「いいえ、ちゃんと学校にも行か

せてもらっていたし、衣食住に何の不便もなかったわ。今になって考えると里親としての最低限の義務を果たしているだけだったのよ」

信 「僕たちは油なんですよ。油が必死になって水に混ざり合おうとしても浮いちやうんです」

しばしの沈黙。

近藤 「つてことは、両親を殺されて君たちは救われたつてこと？」

アメリカ 「まあ、間違いじゃないわね。あたしたちは解放されて、その代わりに凜ちゃんに運命に囚われたのよ。だから、今度はあたしたちが救う番なの」

近藤 「綾川凜も波乱の人生だな。一家

離散後は施設暮らし。しかしながら、施設に馴染めずポン引きに拾われて売春を生業にする。数年後、斡旋先で出会った芸能事務所社長に見初められ芸能界デビュー。ずば抜けた演技力と枕営業が評価され、今では若手女優のトップと言われているほどだ」

アメリカ 「でも、ハゲちゃんに掃除されちゃうのね。それにあたしたちも」

近藤 「(微笑みながら) 仕事だから仕方ないだろ。それじゃあ、そろそろ……」

近藤は上着の内ポケットにゆっくりと手を入れる。

信 「ここでやるんですか？」

アメリカ 「殺される側が言うのもなんだけど、こんなところでやったら絶対にバレルわよ」

近藤 「大丈夫だって。バレたら、それも掃除しちやえば良いだけの話だ」

アメリカ 「あんた、雑よね。掃除屋に向いてないわよ」

けたたましいサイレンと共に緊急車両がファミリーレストラン横の行動を走り去る。

近藤 「パトカー、消防車、救急車、ずいぶんと物騒だなあ」

アメリカ 「今のあんたが言っているいい台詞じ

やないわよ」

信 「何があったんでしょね」

近藤 「あれか、またあの風変わりなサイコキラーか」

信 「なんですか、それ？」

近藤 「ウワサによると輪唱好きのジャック・ザ・リップだ」

信 「へえ、なんか楽しそうな人ですね」

携帯電話の着信音が鳴る。近藤は胸ポケットから携帯電話を取り出し、電話に出る。

近藤 「俺だ。何があった。そうか。わかった」

近藤は電話を切り、立ち上がる。

近 藤 「君たちの掃除は中止だ」

アメリカ 「あら、良かったあ。場末のファミレスなんかで死にたくなかったのよお」

近 藤 「それに綾川凜の掃除も中止だ」

信 「どうということなんです？」

近 藤 「たった今、依頼人が死んだ。だから仕事を続行する意味はない」

アメリカ 「死んだの？ っていうか、依頼人は誰なのよ。死んだんだから守秘義務はないでしょ？」

近 藤 「大御所俳優の鴻上順造だよ」

アメリカ 「どうしてあの鴻上が裏稼業に殺害依頼してんのよ」

近 藤 「遊びで付き合っていた綾川凜が妊娠しちゃったんだよ。妻子持ちの鴻上は墮ろすように頼んだんだけど、綾川凜は拒み続けた。

それでビビっちゃった鴻上は、俺に掃除の依頼をしたってわけ」

アメリカ 「そのゲスは、どういう死に様だったの？」

近 藤 「ロケ現場の仮設トイレに入っている時に便器が爆発したんだと」

アメリカ 「あらあら、クズに相応しい終わり方ね」

近 藤 「それじゃあ、俺は帰るよ」

信 「ハゲちゃんさん、掃除の依頼をしてもいいですか？」

近 藤 「どんな掃除だ？」

信 「綾川凜を掃除してください」

近 藤 「はあ？」

バス停【下り方面】（昼）

屋根付きの古めかしいバス停。ベンチ

の左側に信が座っている。ゆっくりとした歩みで近藤が現れ、ベンチの右側に腰掛ける。

近藤 「早いな」

信 「あたしが早いんじゃないくて、あんたが遅いのよ」

近藤 「アメリカか」

信 「あたしがアメリカ以外の誰に見えるの？」

近藤 「君たちは二つなのに一つの器に入っているから分かり難いんだよ」

信 「まあ、それもそうね。んで、依頼から一年以上経ったけど、ちゃんと掃除してくれたんでしょね」

近藤 「もちろん、完璧にね。(前方を指差し) ほら」

信 「あら、上出来ね」

近藤 「だろ？ 信、これで満足か？」

信 「呼びかけても出てこないから無駄よ。こういうシーンは苦手なんだってさ」

近藤 「そっか。じゃあ、これで俺の仕事は終わりだ。じゃあな」

信 「お疲れ様あ」

近藤はベンチから立ち上がり立ち去る。
信は前方を見ながら微笑む。

バス停【上り方面】(昼)

屋根付きの古めかしいバス停。ベンチの中央に女性が座り、その女性の膝の上に子供が座っている。

了
